

# 邁進

## *Striving*

作業療法学専攻長・教授 岸村 厚志

「To err is human, to forgive divine. (過ちは人の常、許すは神の心)」ということわざがある。1999年12月に米国医学研究所 (Institute of Medicine:IOM) が「To err is Human」というタイトルでレポートを公表したことで医療安全の世界では知らない者がいない有名な言葉となった。医療事故は「組織内で複数の要因が重なった結果生じるものであり、関与した人物の責任を追究するだけでは何も解決しないこと」を提言している。医療安全管理学を学び、初めてこの言葉を耳にした際には、なるほど、個人を攻撃しても意味がない、「ヒトが失敗する」前提で他の対策を考えることの重要性を痛感したものである。

しかしながら、2022年9月5日に静岡県の認定こども園で3歳児が送迎バスに置き去りになり死亡した事件の報道を聞いた際には、「ヒトは誰でも間違える」から「個人を責めてはいけない」とは思えなかった。2021年7月に福岡県中間市で事件が起きたばかりであり、その教訓が活かされていないからである。結果をみると、「ヒトは誰でも間違える」その通りである。福岡県中間市の事件の当事者である園長も2007年福岡県北九州市での同様の死亡事件を覚えており、まさか自身が当事者になるとは思っていなかった、と述べているようである。

ヒトは失敗する生き物とはいえ、なぜこれほどにも、想像力に乏しいのだろうか？おそらく「ニュースで報道されるような死亡事件なんて、自分の園では起こるはずがない」と考えてしまい、普通ならあり得ないと考える「正常性バイアス」がかかってしまったのだと考えられる。そのため、自分事としてリスクを想定できなくなってしまい対策を検討する機会を失った結果であると考えられる。

私たちはどうだろうか？この巻頭言を書くにあたり、これまでの巻頭言を読ませていただいた。第13巻の武田学長による「大学の存続」という巻頭言は大変ショッキングなテーマであり、武田学長の熱い思いが込められていると推察する。この巻頭言を目にした教職員は、どのように受け止めたのだろうか？「まさか本学が潰れるわけがない」「大学なんてそう潰れるものではない」と正常性バイアスが働いてしまっていないだろうか？入職して1年が過ぎた。これほどまでに熱い学長の思いに私自身応えることができているだろうか。「大学の存続」のために何をすべきか、ここにもう一度、武田学長が引用されたヤスパースの言葉を記す。

“ 研究と授業の統合は、大学でのみ実現できることである。最高の研究者は同時に唯一の良い教師となることができる。研究者のみが認識の本来的な過程との接触を可能にするからである。優れた研究者こそが生きた学問であり、こうした人間との交流の中で、学問がいかんして根源的に存在するのが直観され得る。優れた研究者は同じ衝撃を弟子の中に呼び覚ますことにより、学問の源泉へと導くことができ、自ら研究する人だけが、本質的な教えを学生に伝えることができる。”

私たちは、教育のために研究に力を入れる。それが「大学の存続」に繋がる道である。私自身は、研究をするために、そして院生の研究指導がしたくて学術の世界である大学で勤務する道を選んだ。残念ながら、院生の指導をできる資格はまだ無く、本誌にも論文が未だ投稿できていない。院生指導の資格を得るためには、博士の学位が最優先である。研究を推し進め論文を書くしかない。正常性バイアスに陥ることなく、少子化が進む中、「大学の存続」をかけ「研究」に邁進していきたい。